二

翌日、磐音は宮戸川の仕事帰り、両国橋を渡った。

両国西広小路では朝市が立って、青物などが路上に広げられ、多くの買い物客で賑わっていた。

「坂崎さん」

と人込みから声をかけられた。

振り向くとおこんが日差しの中に立っていた。

白っぽい紬を着こなしたおこんは一段と艶やかに輝いていた。おこんの後ろに小女が控え、竹笊に青菜や胡瓜などを入れ立っているところを見ると、買い物に出てきたらしい。

「おこんさんか、今日も暑くなりそうじゃな」

「何としてもひと雨ほしいわね」

「大川の水もどんより流れている」

「お出かけなの」

「今津屋の老分どのに願いことです」

「ならご一緒しましょうか」

おこんと磐音が肩を並べ、小女が後ろに従った。するとあちこちから、

「おこんさん、残った夏大根が買ってくだせえ」

とか、

「よう、お似合いだよ。西瓜を安くしとくからさ、持っていっちゃくれねか」

と声がかかった。

今津屋のおこんは両国界隈でも評判の美人として知られていた。

そんな声におこんは、

「夏大根が残るようなら、うちの台所に持ってきて」

とか、

「あいにく、西瓜は昨日買ったばかりなの」

とか、小気味よく応対して人込みを抜けた。

その時、二人の行く手から、

「わああっ！」

という叫び声が起こり、人込み賀さっと二つに割れた。

磐音たちが見ると、浪人者が三人、隠居風の老人の肩を小突いては、怒鳴り声をあげていた。その足元では小僧が土下座して頭を石畳に擦り付けていた。

「この小僧、武士にぶつかっておいて、挨拶もなしか。小僧の不始末は主の不始末じゃ。そのほう、、この世に十分生きておると見えるが、礼儀も知らぬか」

「これは申し訳のないことで。ですが、お侍様、私も新吉も何度も謝りましてございますよ。ほれ、新吉を御覧ください」

「これが謝っておると申すか」

頭分が土下座した小僧を蹴った。

小僧が悲鳴を上げた。

「乱暴はよしてくだされ。金が要るのならそう言ってくだされ。隠居の身、たくさんは懐にしておりませんが、御用立てしますでな」

「ふざけたことをぬかしおって。高木、こやつを人込みから連れ出せ。挨拶の仕方を教えてやろうではないか」

仲間が頷くと老人野手を掴んだ。別の一人が小僧を引っ立てようとした。

「おまえさん方、お待ちなさいな」

磐音の傍らからつかつかとおこんが出て行き、

「讃岐屋さんの御隠居様、小僧さん、とんだ災難ですね」

「女、邪魔立ていたすな。痛い目に遭うことになるぞ」

三人のうち、髭面の大男がおこんを睨んだ。

「近頃、人込みで自分からぶつかっておいて、お金を強請ろうという輩がこの界隈に出ると聞いてたけど、おまえさん方だね。ここは朝市が立つ西広小路だよ。人と人がぶつかるくらいは当たり前なんだ。それをいいことに脅しの材料にしようなんて薄汚いね。」

おこんの切れのいい啖呵が飛んだ。

「ぬかしおったな。高木、富田林、かまうことはない。この女も連れて行け」

浪人の頭分が命じた。

「呆れてものが言えないわ。ご隠居さんも小僧さんもゆきましょうか」

おこんが二人をかばうようにその場から連れだそうとした。するとおこんの肩を頭分がむんずと掴んだ。

その手首が反対に磐音に掴み返され、捻り上げられた。

「あ、痛てて。何をいたすか！」

「おこんさんの言われるとおり、無理を言ってはいかぬな」

磐音の声が長閑に響き、

「おこんさん、下がっていてください」

と注意した。

無法者の仲間二人が気配なく剣を抜いた。

磐音の手が軽やかに逆手に捻られて、頭分の巨体が宙に舞った。

「玉や！」

さすがに両国、人込みの仲から声がかかった。

浪人二人は怒りに我を忘れた。

「叩っ斬ってやる」

高木と呼ばれた浪人が、上段に振りかざした剣を叩きつけるように振り下ろしてきた。

その懐に飛び込んだ磐音が胸を肩で突いた。すると相手は、

どーん！

と尻餅をついた。

残る一人富田林が、振り向く磐音の喉頸めがけて、突きの構えで突っ込んできた。

磐音は余裕を持って切っ先を躱すと、腕を取り、膝で下腹部を蹴り上げていた。

三人目も腰砕けに倒れ込んだ。

「そなたら、まごまごしていると町方が駆けつけて参るぞ」

「磐音ののんびりした声に、浪人たちは慌てて人込みに紛れるように走り込んでいった」

「ようっ！日本一！」

「待ってました！」

両国西広小路に歓声が起こった。

「おこんさん、ご隠居どの、小僧さん、ここはたいさんするに限ります」

磐音とおこんに導かれて今津屋の前まで人込みを掻き分けてきた。

「おこんさん、いやあ、助かったよ。それにしてもおこんさんの知り合いはお強いな」

と讃岐屋の隠居の半左衛門が磐音に白髪頭を下げた。

そこへ老分番頭の由蔵が顔を出して、

「どうなされたな」

と訊いてきた。

おこんが手際よく経緯を話すと。

「そりや、ご迷惑でしたな。半左衛門様、そやつらが待ち受けているとも限りません。うちでしばらく休んでいってくださいな」

と言い、おこんに、

「お二人を奥にな」

と命じた。

讃岐屋の主従が奥に消え、今津屋の店野の前に磐音と由蔵が残された。

「今日はなんぞ御用ですかな」

「頼みごとばかりで恐縮ですが、先日、調べてもらった豊後関前藩の借金のことです」

「立ち話もなんです、こちらにお入りなさい」

二人が入ると、

「坂崎様、いらっしゃいまし」

という声が磐音を迎えた。

磐音はこれまで今津屋の用心棒を納戸か務めていたから、大勢の奉行人とも知り合いだ。

「暑いですね」

磐音は挨拶を返すと板の間を上がり、由蔵の席の傍らに座った。

江戸の両替商でも一、二を争う今津屋の老分の机は、帳場格子に囲まれて、ちょっとした商用の話ができる広さが合った。

老分とは、両替商の総支配人の呼び方で、別家格の番頭のことを言った。だが、由蔵は分家せずに今津屋で睨みを利かせていた。

「豊後関前藩は京橋の両替商藤屋どのに五千両の借財がある。そのことは、過日、藤屋の老分の久兵衛どのからそれがしが確認をもらいました。その時、深くは突っ込めませんでしたが、借り受けには江戸家老の篠原三左様が来られたか、はたまた代理の者が顔を出したか、借り受けを実際に担当した者の名を知りたいのです」

「それは困りましたな」

と由蔵は言った。

「いえね、私どもの仕事は守秘がお客様との約束事なのです。藤屋さんが坂崎様に漏らされた事と事態がすでに違反でな」

「それ重々おも承知です。底を由蔵どののお力でなんとか」

磐音も必死だった。

しばらく考え込んでいた由蔵が、

「仕方ない、坂崎様のことだ。ひと肌脱ぎますか」

と胸を叩いた。

「助かります」

「ただし、坂崎様、私も今津屋を預かる身、ただ働きというわけには参りませんぞ」

と言った。

「どうすればよろしいのか」

「夕刻まで待ちなされ。私が藤屋様まで同行して、老分の久兵衛さんにお頼みしてみましょう。その後、私には所要がございますれば、それにお付き合いいただくというのは」

「それは一向に構いませんが」

「ならば、台所に参られて、昼餉でもてべていらっしゃい」

かって知ったる台所に行くと、

「おや、また用心棒の仕事かねえ」

と勝手女中のおつねが笑った。

「いや、老分どのに頼みごとに来ただけでな。ユウコムまで待つことになった。老分どのに飯でも食ってまてといわれたのだ。仕事もせぬのにちと恐縮じゃが」

「そんなことかね。坂崎様の食いっぷり店でも評判、いつでもこらっせえよ」

その日の昼食は冷やしうどんに焼きおにぎり、古漬けの漬物が丼に盛られて、すでに卓上に並んでいた。うどんの具は青葱、茗荷が刻んであった。

「暑さでみんなげんなりしているでよ、味噌仕立ての汁でつるつるうどんだ。汁に胡麻も擂り込んであるで、体にもいいよ。たっぷりたべなっせ」

磐音は奉行人より一足早く味噌胡麻風味の汁でうどんをすすった。そこへおこんが顔をだしたが、

「坂崎さんは、食べている間は何を行っても無理ね」

とまた奥へ戻っていった。

磐音がうどんと焼きおにぎりを３つ食べて満足したところに、奉行人たちが交代で食事に来た。

若い手代や小僧たちだ。恐ろしいほどの勢いでうどんを啜り、焼きおにぎりをぱくついた。そして、さっさと店に戻っていった。

今津屋では昼は手の空いたものから食べる習わしだ。次から次へ新手がやってきては、交代していく。

一息ついた頃、再びおこんが顔を出した。

「最前、台所に顔を出していたようじゃが、何ぞ用事だったかな」

「讃岐屋のご隠居が、お帰りになる前にご挨拶をしたいとおっしゃったの。でも、坂崎さんは、うどんをすすっているんだもの、上の空で挨拶を受けるどころじゃないでしょう。そう申し上げて、気持ちだけは伝えますとお送りしたの」

「それは手間をかけたな」

「讃岐屋様は江戸でも名代の紺屋さん。そのうち、お礼が届くかもしれないわね」

「なにもしたわけではない。お礼なんぞは困る」

「番頭さんに頼みごとはしたの」

「お陰さまで、引き受けていただいた。夕暮に老分どののお供で京橋の藤屋どのに参る。その後、どこぞにお付き合いすることになっておる」

「あれまあ、あの仕事を引き受けさせられたの」

「あの仕事とはなにかな」

「まだ聞いてないんじゃあ、私から話すわけにはいかないわ。ともかく老分さんは、うまい具合に坂崎さんと会うことができたのよ。昨日から、坂崎さんにお頼みするかどうか、迷ってらしたもの」

「そうか、これは仕事か」

「仕事よ、たっぷり汗をかくかもしれないわ。坂崎さん、いつもの部屋で体を休めておいたほうがいいわ」

とおこんが言った。

「ならば安心して、昼寝でもいたそうか」

今津屋の階段下の控え部屋に行くと、磐音は満腹した腹を抱えて昼寝を始めた。

磐音が目覚めたとき、すでに夏の日は傾き始めていた。慌てて店に行くと由蔵が小僧の宮松に供を命じていた。

「おおっ、起きられたか。ならば出かけますかな」

宮松が提灯を持たされたところを見ると、帰りは遅くなると磐音は覚悟した。

「いってらっしゃいまし」

という奉行人たちの言葉に送られて、馬喰町の通りに出た。

という奉行人たちの言葉に送られて、馬喰町の通りに出た。

ここいら辺りは公事宿や旅籠が軒を連ねる一帯で、泊り客が番頭に迎えられたりしていた。

由蔵はちょこまかと足が早い。

長身の磐音も追いつくのが大変なくらいだ。

宮松など小走りに付いてくる。

東海道常磐町の筋に店を構える藤屋丹右衛門野店野前に来ると、両替商の標章、分胴が軒にぶら下がり、夕日を浴びていた。

「おや、今津屋さんの老分さんに坂崎さん」

店の奥から家がかかった。

「ちょっとおじゃましますよ、久兵衛さん」

由蔵は藤屋の老分久兵衛に挨拶すると目配せした。すると久兵衛が、

「込み入った話ならばこちらにお上がりを」

と店の奥の小部屋に由蔵と磐音を案内した。

「久兵衛さん、ちょいと無理を承知の願い事です」

と由蔵が磐音を振り見た。すると久兵衛が飲み込んだように、

「さきごろのご融通に関わる話ですか」

と磐音と由蔵を交互に見た。

「久兵衛さん、無理は承知だ。五千両を借りられたとき、実際に実務を担当なされたのはだれか、耳打ちしてはくれまいか」

由蔵が言った。

「番頭どの、藩の内紛に絡むこと、融通を快諾なされた藤屋どのにはなんとも申し訳ないことながら、藩の浮沈に関わる大事でござる。このとおりです」

磐音は頭を深くと下げた。

「坂崎様、頭を上げてくださいな。あの一件については、関前藩は約定に違反なされて、利息の払い込みもない。うちでも困っているのです。なにがおしりになりたいので」

「借受人の名は江戸家老篠原三左様だそうにございますが、番頭どのは篠原様に直に面談されましたか」

「いえ、篠原様には一度も」

「では関前藩の窓口はたれにございましたかな」

「御留守居役の原伊右衛門にございますよ」

原は宍戸一派の中心人物だ。

「それで氷解いたした」

磐音は大きく頷いた。

「この所再三再四、原様にご面会を願っておりますが、家老の篠原様が病気故待てとか、居留守ばかりでしてな、うちでも困っております」

「迷惑をかけます」

磐音は頭を下げた。それしか今の磐音にできる事はなかった。

「久兵衛さん、私はね、いずれこの坂崎さんが藩に帰参なされて、腕を振るわれるときが来ると信じてきます。その時まで気長に待ってくださいな」

今津屋の由蔵が慰め、

「お邪魔しましたな」

と立ち上がった。